３２「大黒屋光太夫」

亀山藩南若松村（現鈴鹿市）に生まれた四郎兵衛（後の大黒屋光太夫）は、２０代後半、伊勢の国白子の廻船問屋、諌右衛門の沖船頭職を世襲する大黒屋の養子となり、光太夫の名を継いだ。

天明２年（１，７８２年）１２月光太夫は神昌丸の沖船頭として、船員１７名とともに紀州藩の蔵米を積み、白子の浦から江戸に向けて出航する。

この神昌丸が遠州灘沖を航行中、大時化に遭ってしまう。

大波に舵を失い、漂流は決定的となった。

髷を切って神仏に祈る。浸水した海水を必死で掻い出す。

載せられた大量の荷物を投棄すれば、莫大な損失を諌右衛門にあたえることになる。自分を信頼し荷の運送を託した諌右衛門に致命的な損害をあたえることは絶対に避けねばならない。

しかし、船頭は水主(かこ)たちの命を守ることが義務づけられ、それを第一義と考えるべきである。彼らにはそれぞれに家族があり、それらの者を嘆き悲しませるようなことはできない。光太夫は経験豊かな三五郎の意見に従い、止む無く刎(はね)荷をする。

勿論、紀州藩から搬送を命じられた米を投棄することはできない。それは藩米であり、自分たちの生命にもかえられぬ荷であった。

刎ね荷をしたものの、依然として風波で船体は激しい揺れをみせ、船体は絶えずきしみ音をあげている。波は雷鳴のような音を立ててのしかかり、帆柱は、振子のように傾いて揺れる。

船が波の激突を受けつづけ、海面近くまで大きく傾く帆柱を見つめた光太夫は、このままではまちがいなく覆没すると思った。光太夫は、ついに帆柱を切る決心をする。

帆柱を切り倒した船は完全に機能を失い、折からの黒潮に乗り、船は北へ北へと流された。
全く陸地は見えなくなり７ヶ月あまり漂流の後、翌天明３年７月、ついに！ある島に漂着した。

そこはアレウト（アリューシャン）列島西端のアムチトカ島であった。ここまで生きてきたことだけでも奇跡に近い。

彼らには自力で日本に戻るすべはなく、何とか生き延びることを考える以外にない。

彼らは、アレウト人を使い毛皮を獲るために滞在しているロシア人とともに暮らす。

そこにはラッコやアザラシの毛皮を求めて進出して来た、ロシア人から搾取される北方少数民族の現実があった。

彼らは、共に生活する中で一語一語、必死にロシア語を覚えた。

口は「ロート」、頭は「ゴロワ」、顔は「リチオ」、唇は「グボイ」、眉は「ボロウエ」、足は「ノガ」、筆は「ペラ」、頭巾は「カウパアカ」、盥（たらい）は「ムツェ」、水は「ボダー」。

そしてやっと島を脱出することができるようになった。ありあわせの材料でロシア人と協力して船を造ったのである。漂流して４年が経っていた。

途中、いくつかの島で飢えと寒さに耐え暮らしながら、カムチャツァ半島のニジニ・カムチャツクに辿り着く。

漂流以後、寒さや飢えによって多くの乗組員が亡くなった。船中で１人、途中の島で７人、さらにカムチャツァに着くまでに３人が死に、生き残っているのはわずか６名だけになった。漂泊の旅はすさまじいものであった。

カムチャツァでの生活はこれまでと違い、異文化との闘いでもあった。

異国では牛等の獣類を食うときいているが、日本ではそれは鬼にも等しいことだとされている。牛馬は農耕や運搬に使われるもので、それを食えば身がけがれ、ましてその乳を飲むことなど考えられない。

光太夫たちは、その乳を飲んでいたことに身のふるえるような驚きをおぼえた。

カムチャツァでは、漂着した南部藩領下北半島の水主の子孫キリロ達と遭遇する。ロシアに漂着した彼らの親は、故国に戻る望みを失いロシアの女を妻にして子をもうけたのである。

日本人の子孫たちは、ロシア人たちに日本語を教える職を与えられ、生活を保証されているのであった。ロシアは、日本との唯一の貿易国であるオランダからの情報を知り、“豊かな国”日本との交易を望み、それに備えて日本語習得を積極的に行っていたのである。

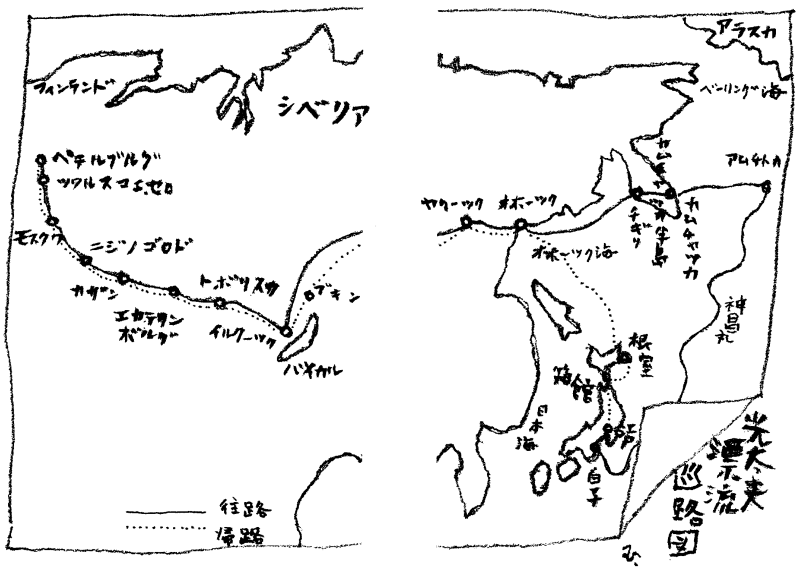
光太夫はロシアに留まって平穏に暮らすことを勧められる。しかし、光太夫は日本に戻ることを切望し、彼からロシア語で帰国の請願を書けるよう教えを請う。

キリロは、願いが叶うとは思えないがそこまで考えているなら、とりあえず代官所に願い書を出してみてはどうかと協力してくれた。

ここから、光太夫の帰国への闘いが始まる。

ロシア語の読み書きを習い、やっとのことで書き上げた帰国の請願を代官所に提出するも、代官からはヤクーツクの役所に出さなければだめだと言われる。

馬橇に乗って人家のない荒涼とした地を何日もかけ、苦しい旅の末に辿り着いたヤクーツクでも、結局、シベリア総督府であるイルクーツクでなければだめだということがわかる。



これまで逗留した地では、家を提供され食物もあたえられて保護される。ロシア政府は、自分たちをどのように考えているのだろうか。なんの益もない漂民なのに、なぜこのような扱いをするのか。

南部藩領の漂民たちと同じように、政府はあくまでも自分たちをロシア領にとどめ、妻帯させてロシアの土と化そうとしているとしか思えない。しかし、この時点で光太夫にはそれが何故なのか理由がわからない。

イルクーツクでは、日本に帰りたいと望みながらも、結局帰ることが叶わずにロシアに留まっている何人かの日本人と遭う。

知り合ったトラペズニコフから、彼の父がことあるごとに漂流民になったいきさつについて聞かされていた話をきいた。

トラペズニコフは、父が繰返し口にしていた、と前置きして事情を話しはじめた。

「４５年前の１，７４４年（延享元年)、父久助は水主として「多賀丸」に乗ったが、船は大暴風雨に

遭って破船、漂流の後、オンネコタン島に漂着した。その間に乗組の者１８人のうち７人が死亡、島に上陸してから沖船頭も死んだ。残りの１０人はロシア人の役人によってカムチャツァに連れてゆかれ、さらに都に送られてそこに逗留後、イルクーツクに移されて身を落着けた。

その中の３人がトラペズニコフ、タタリーノフ、セメノフの父であるという。

３人は、帰国を願いながらも望みが叶わぬことを知り、それぞれロシアの女と結婚し、洗礼を受けた。イルクーツクには、航海学校内に日本語学校が設けられていて、漂流民たちは教師となってロシア人の子弟たちに日本語を教えていたが、やがてつぎつぎに死んだ。」

タタリーノフ、セメノフの父も教師だった。

トラペズニコフの話はさらに続く。

「ロシア領に漂着した多賀丸の漂流民たち。かれらは一人残らずロシア政府の指示で日本語学校の教師に任ぜられ、ロシアの宗教に帰依して洗礼名を受け、それはキリシタン禁制の日本へ帰れぬことにつながっている。

むろん、かれらは日夜、故国へ帰ることを熱望し、激しくもだえ苦しんだはずであった。しかし、帰国への道は閉ざされ、かれらは苦悩の末洗礼を受けこの世を去った。」

光太夫は、体がふるえるような恐怖感におそわれた。自分より以前にロシア領に漂着した日本の漂流民の中で帰国できた者は一人もなく、ことごとくロシアの土と化している。

かれらの悲痛な泣き叫ぶ声がきこえるようであった。

なぜ、かれらは帰国できなかったのか。

光太夫は、それには巨大な力が作用しているのを感じた。日本との接触がないロシアは、日本と貿易をしているオランダなどから日本についての知識を得ているのだろう。貨幣が大判、小判であることでもあきらかなように、日本は豊富な金にめぐまれ、神秘的な国とされているのではないのか。

たしかに日本は、ロシアなどと違って温暖な気候にめぐまれ、耕地は肥沃でさまざまな農作物が豊かに収穫されている。海には魚介類が満ち、国土は緑におおわれ、清らかな川が至る所に流れている。

港は、ロシアのように長期間凍結することなどなく、春夏秋冬、船は自由に港に出入りできる。北国では雪が降るものの、氷に閉ざされることはなく、人馬の往来もさまたげられることはない。

ロシアの海は一年の半ば近くが氷に閉ざされ、港に船の出入りは全く不可能になる。

それはロシアにとって宿命的な弱点で、そのため港の凍結することのない南の地への志向がきわめて強い。海をへだてた日本は温暖で、海は凍らず理想の地に思えるのだろう。

その上、豊富に金を産するという日本に、ロシア皇帝は、将来積極的に接触することを考え、そのためには日本語に通じる人材を養成する必要を感じているのだろう。

日本の東海岸ぞいに流れる黒潮は北へとむかい、大時化に遭遇して破船、漂流した日本の荷船はその潮流に乗ってカムチャツァ半島方面に漂着する。ロシアにとってそれらの船の漂流民は、願ってもない存在で、かれらを教師に仕立ててロシア人子弟に日本語を習得させている。

ロシア政府は、オランダ等からの情報で日本がきびしいキリシタン禁制を国是としていることを知っている。海難事故で他国に漂着した者がキリスト教系の宗教に帰依すれば、その者の帰国の道は完全に断たれる。そのことを知った政府は、教会で漂流民に洗礼を受けさせて故国へ帰る望みを放棄させ、日本語教師としてとどまらせるという方法をとっているのだ。

光太夫は、漂流民たちが日本語の教師をつとめていたということに、大きな驚きをおぼえた。それは

想像もしていなかったことであった。
　イルクーツクで、カムチャツァからオホーツクまで共に旅したカピタンから紹介された、キリル・ラクスマンの全面的な協力を得て、首都ペテルブルグの長官宛に、やっとのことで帰国願書を送ることができた。ラクスマンはフィンランド出身の博物学者、ロシア科学アカデミーの会員で知名度が高い。
　カピタンとの遭遇が光太夫に幸運をもたらした。
　しかし、何ヶ月経っても何の音沙汰もない。回答がないところを見ると、役人が手元に留めているか破棄してしまったとしか考えられない。ラクスマンは、光太夫が帰国の目的を果たすには皇帝に直訴するしかないという。彼は光太夫を連れて皇帝に会いに行くという。
　光太夫は、呆気にとられた。皇帝と言えば、日本では京におられる天皇か江戸の公方（将軍）様で、そのような雲の上の存在であるお方に船頭にすぎぬ自分が直訴できる道理はない。
　直訴するとは皇帝に会うことで、なぜラクスマンがそのようなことを口にしたのか不可解であった。
　光太夫は、皇帝は日本の天皇、将軍に相当するお方で庶民が眼にすらできぬ存在であり、直訴するような行動に出ればたちまち極刑に処せられる、と言った。
　ラクスマンは驚いたような眼をしながらもうなずき、「我ガ国デハ、ソノヨウナコトハナイ」と、言った。
　光太夫は、寛政３年（１，７９１年）１月に、帰国嘆願のためにラクスマンとともに単身ロシア平原を横断し、首都ペテルブルグに向かった。
　イルクーツクから６，０００キロ余りの道を１ヶ月余で走破、ペテルブルグの市街地に入った。
　光太夫は、新しく建設された華麗な都市ペテルブルグを目の当たりにする。
ラクスマンは、光太夫と話し合って皇帝に上呈する願書の作成にかかった。
　光太夫の生国、海難による漂流、そしてアムチトカ島への漂着。島からカムチャツァ、オホーツク、ヤクーツクをへてイルクーツクに送られ、その間に１７人中１２人が死亡、残った５人のうち１人が凍傷で左足の切断手術を受けたことなどを記載した。
　光太夫が書面に署名し、ラクスマンはそれを手に外務大臣代行のもとにおもむいた。外務大臣代行は陸軍元帥でもあって、伯爵の爵位もさずけられている要人であった。
　ラクスマンは、願書が皇帝のもとに達する最も確率の高い方法として、面識のある外務大臣代行に依頼したのである。
　しかし、願書を提出してか２ヶ月以上経過しても何の音沙汰もない。
　イルクーツクで提出した願書は２度も願いは叶わずという回答を受け、３度目に出した願書には返事もなかった。都へ行って皇帝に直訴すれば必ず道が開けるというキリルの言葉にはげまされ、はるばるペテルブルグに願書を提出するために来た。
　しかし、それに対する反応がないのは、政府の役人が願書を手もとにとどめたままにしているのか、それとも皇帝の眼にふれたものの皇帝が無視しているのか。
　光太夫には強い失望感が胸にせまった。もうこれでいいのだという思いがしている。
　光太夫は絶望の末ほとんど諦めかけたが、ラクスマンはそうではなかった。彼は決して諦めてはいけない、これが始まりだという。
　光太夫のために再三願書を提出することにつとめ、わざわざペテルブルグに私費で連れてきて要人に願書を出し、反応がないと知ると、皇帝の後を追って別宮のある地に行こうという。そのようなことを

してもラクスマン自身にはなんの益もなく、ひたすら光太夫の切望する帰国を実現させようとしているだけなのだ。

光太夫はラクスマンの、諦めということを知らぬ不屈，強靭さに驚きを感じた。ラクスマンは、諦めることなど論外として、さらに目的を果すため力を尽くそうとしている。あきらかにラクスマンは自分とは全く異質の人間だということを感じる。

それは、ロシアという厳しい風土と広大な大地に培われたものなのか？
しかし、諦めてはいけなかったのである。

商務大臣から書状が届く。商務大臣は駐英公使をしたこともあって貿易の総取締りをし、漂流民の取扱いも一任されている。

書状の内容は、ペテルブルグで願書を提出した外務大臣代行が別宮に来て皇帝にこれまでの経過を上奏し、それをきいた皇帝が、ラクスマンとともに漂流民光太夫をただちに参内させよ、と命じたのである。

ついに、光太夫は女帝エカテリナ（Ⅱ世）と面会することになった。それは即位記念式典の日であった。彼は、異国人が初めて女帝に拝謁する礼式を教えられ会場に向かう。

皇帝との面会は当然ベール越しだと思っていた光太夫は、そうでないことに驚く。

秘書官を通して日本を出てからのことを問われる。
光太夫は、臆してはならぬと自らをはげまし、女帝の耳にも達するようにはっきりした口調で話す。

故郷白子浦を出船してから大暴風雨に遭遇し、舵、帆柱を失って漂流、飲料水が尽きて雨水を貯め、渇きをまぬがれたこと。その間に水主１人が死亡し、辛うじてロシア領アムチトカ島に漂着したこと。

この島に出張していた商人の手代に保護されたが、風土と食物がなじまぬため７人がつぎつぎに息絶えたこと。その後、カムチャツァに移されたが、そこでも３人が病死し、オホーツク、ヤクーツクをへてイルクーツクに送られたこと。

その旅の途中、想像を絶した激しい寒気で１人が左足を凍傷におかされて手術で切断され、光太夫がラクスマンとともにイルクーツクからペテルブルグに出発する直前、さらに水主１人が死亡したこと、などを奏上した。

皇帝エカテリナは深い哀れみをもち、帰国を許すことを決める。

後日、皇帝からの書面が届く。「願イニヨリ帰国ヲ許ス」というものであった。

エカテリナは、光太夫に引見した後、商務大臣に光太夫たちを日本へ送りとどけるよう指示し、出発港はオホーツクにせよ、と命じた。出発の準備はイルクーツクでととのえることになり、イルクーツクの省長官に指令を発し、長官はすでに船の手筈に手をつけているという。

エカテリナの指示で自分たちを日本に送りとどける用意が、すでに進行している。夢に描いていた帰国が実現することに、かれは思い切り叫び声をあげたいような喜びをおぼえた。

帰国が決定したことで、高官たちの光太夫に対する扱いに変化が起った。

これまでは異国の地に流れついた哀れな漂流民という眼でみていたかれらの印象は拭い去られ、未知の国日本からきた貴重な存在として、礼を失わず相対すという雰囲気が濃くなった。

かれらは、光太夫が豊かな知識をそなえ人格的にもすぐれた人物であることを知っていて、畏敬の念をいだいていた。日本の文字に精通し、さらにロシア語の会話はもとより読み書きも或る程度こなすようになっている。女帝に仕えるかれらの胸には、光太夫が帰国後、ロシアの良き理解者として日露両国

の友好に寄与してくれるのではないか、という思いがひそんでいるようだった。
　皇帝からは、想像を絶する多くの金品の下賜があり、船まで仕立てて日本に送り届けてくれることに、光太夫は涙を流した。
　帰国が許されたのは、漂流民の送還を名目にして、ロシア皇帝の親書を持った使節を送り込み、日本との交易を行うという大きな目的のためである。
　　光太夫は１１月ペテルブルグを出発、寛政４年（１，７９２年）１月にイルクーツクに戻る。
　イルクーツクでは辛い別れをしなければならない。日本に戻れるのは光太夫と磯吉，小市の３人だけで、ここまで生き延びた残りの２人は、改宗したため帰国は叶わないのである。
　彼らとの別れは、生涯再び会うことのない永遠の別離であった。２人はロシアの地にとどまり、やがて死を迎え、その骨は粉化してロシアの土となる。

　８月にはオホーツクの港に移動。日本への使節は、キリル・ラクスマンの息子のアダム・ラクスマン中尉が当たり、９月２５日にオホーツクの港を出発し、１０月２１日には北海道の根室に着いた。
　そこで、光太夫と磯吉は日本側の役人に引き渡され、翌年８月には江戸へ送られた。
　せっかくここまで生きてきたのに、小市は不運にもこの根室で病死してしまったのである。
取り調べは、ロシアの国情について詳細な訊問があり、その陳述内容は克明に記録された。
　幕府にとって、光太夫と磯吉は貴重な存在とされていた。ロシアという国があることはオランダを通じて知ってはいたが、その国情は未知に近かった。
　難破したいくつかの船がロシア領に漂着したことはつかんでいたものの、日本にもどってきた漂流民は皆無であった。そのような中で、光太夫が磯吉とともにロシア船で送還されてきた。
　２人は１０年間もロシア領で過し、各地を転々として多くのものを見聞している。しかも光太夫は、帝都であるペテルブルグまでおもむき、宮殿内に入って女帝エカテリナにも引見されている。
　２人は、ロシアに逗留中、高位の役人や豪商とも親しく交わり、政治機構、経済、宗教、風俗、海運、陸路の旅の仕組み、軍事等の知識も得ている。それに２人は、長年のロシア領での生活でロシア語を身につけ、ことに光太夫は拙いながらもロシア文を書きつづることもできる。
　当時幕府の中心人物であった老中松平定信は、米の生産調整（余ったらロシアに輸出、不作の年はロシアから麦などの穀物を輸入）のため、ロシアとの限定貿易を考えていた。
　しかし、定信の突然の失脚により実現ならなかったことは、光太夫にとっては不運なことであった。
　１５年前の安永７年（１，７７８年)、ロシア船が蝦夷の根室に来航、応接した松前藩士に交易を求めた。ロシア船には、日本語学校の教師であった漂流民から日本語を習ったロシア人通訳が乗っていた。
　このような経緯から幕府は、日本に接近を企てているロシアに強い警戒心をいだいていたのである。

光太夫らは、妻帯は許されたが故郷への帰国は許されず、清水門近くの屋敷に留め置かれた。
　幕府が２人を江戸へとどめたのは、近い将来ロシアの進出を予測しているからであつた。ロシアは必ず通商を求めて接近してくるはずで、その折にはロシア事情に通じロシア語も話せる２人、ことに光太夫を折衝の要員として手もとにとどめておきたかつたのである。
　彼らがロシアで見聞したことは、将軍侍医の桂川甫周が聞き取り、克明に記した「北瑳聞略」としてまとめられ、幕府にとって異国を知る貴重な資料となった。

井上靖の『おろしや国酔夢譚』が書かれた当時、帰国したあとの光太夫、磯吉は、終身幽閉の後半生を送り、故郷にも帰れなかったと思われていた。

しかしこの本の作者吉村昭は、大黒屋光太夫顕彰会を通じて「寛政十年・磯吉帰郷文書」や「享和二年・光太夫帰郷文書」など帰郷を裏づける文書の存在を知った。また光太夫、磯吉は将軍家斉に拝謁し、幕府から「奇特成志」を認められて、幕府の養い人となった。それはあまり拘束のない自由な生活であった。二人は帰郷していたのである。

まず磯吉が帰郷し、ついで光太夫が帰郷した。

享和２年（１，８０２年）２０年ぶりに故郷の若松村に足を踏みいれた光太夫は、姉や親類縁者と再会。伊勢神宮に参詣し、破船した折に伊勢神宮の御加護で幸いにも死をまぬがれた御礼を謝した。廻船問屋一見諌右衛門に詫びを言い、若宮八幡神社で死んだ水主たちの霊をなぐさめる。死亡した水主たちの顔がつぎつぎにうかび、かれらの霊を守って欲しいと祈願した。

水主たちの遺族に対し、船頭として死をまぬがれさせられなかったことが後ろめたく、村人の眼を恐れて外を出歩くことはできなかった。

参拝したことで気持が晴れやかになった。そして、生家と養子先の菩提寺へ行き墓にまいった。

江戸へ戻った彼は、孤独感と徒労感で虚ろな日々を過した。ふる里で送った日々が重苦しく、わずかに船主であった一見諌右衛門に詫びたことが救いであった。

光太夫の旅はすべて終わった。すべての務めを果したはずの光太夫の姿は虚ろであった。

それは多くの船乗りを亡くした彼ひとりの罪ではなかった。彼が見、聞き、触れ、知り、味わった異国の自然、風土、人間、建物、食物、生活、習慣を共通の財産にする度量が日本の為政者になかったからだ。光太夫たちの苦難の旅を糧にして、日本の歴史が近代の扉を開けるにいたらなかった時代の罪といえるだろう。光太夫の虚しさは、夜明け前の近代日本が味わわなければならなかった悲劇を象徴している。

光太夫の墓は本郷興安寺、そして故郷の鈴鹿市にある。　（２，０１１．１１．２６）